

南アルプス縦走報告

8/17（日）～8/24（日）

M2 只左一也

8月17日から8日間の日程で、広河原から入山し、北岳～間ノ岳～塩見岳～荒川岳～赤石岳～聖岳～光岳（この7つはすべて百名山です。私は百名山にはこだわらないですが、参考までに）と南アルプスのメインの稜線を南へ縦走し、40km 弱の長い寸又川林道を通して寸又峡温泉へ下山しました。

この夏はずっと天候が不安定で、特に山行期間中は日本全国あちこちで集中豪雨があったようですが、行動中雨に降られたのは最後の2日間だけで、しかも最後の2日間は雨の似合うコースだったので、南アルプスの良さを満喫した山行となりました。（3日目の塩見岳だけは、かなりの強風と濃霧で、その良さを味わえなかったのが残念でしたが。）

1日目 8月17日（日）

高尾 7:03 — (JR) — 8:46 甲府 9:00 — (バス) — 11:11 広河原 11:35 — 13:40 二俣 14:00 — 16:00 稜線（小太郎尾根） 16:05 — 16:40 北岳肩の小屋（幕営）

（歩行時間：4時間40分）

初めの予定では、この日の夜遅い電車で出発して、甲府駅で仮眠して朝4時出発の広河原行きバスに乗るつもりだった。しかし、前夜に支度を終わらせ、特に用事もなかったので、昼のうちに広河原へ着いてテントを張ってのんびりしようと、朝早く家を出た。

高尾からの中央線は登山客が多かった。高尾では重い曇り空だったが、甲府盆地に入ると天気が良くなり、青空も覗いていた。塩山駅で多くの乗客が降りた。奥秩父へ向かうのだろう。

広河原行きのバスは特別混んでも空いてもいなかった。険しい道をバスが進む。おばさんの車掌さんの言うところだと、朝はガスがかかっていた視界が悪かったのが、時間が経つにつれてガスがとれてきているので、天気が良くなっているようだ。

広河原に予定通り11時過ぎに到着すると、停留所でバス会社の職員が大音量で女子マラソンの中継を聞いていた。

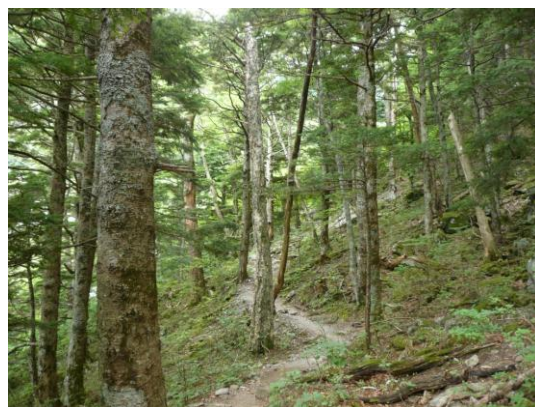


広河原のバス停前

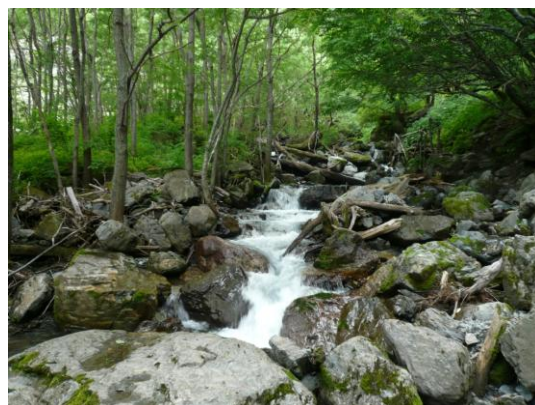
広河原のテント場に向かううちに、この日このまま広河原に泊まるのがもったいないという気持ちになってきた。出発前に聞いた天気予報だと、2、3日よくないようなことを言っていたので、北岳からの展望はあまり期待していなかった。確かに雲は多かったが、青空も覗き、悪くなる気配もない。翌朝北岳から展望を期待できるような気もしてきた。初日で荷物が重く、寝不足で足取りは重かったが、ペースが悪すぎたり天候が急に悪化した場合は、白根御池小屋で幕営すればいい。そう思って、北岳肩の小屋を目指すことにした。



野呂川を渡る吊橋



北岳への登り始め



大樺沢沿い進む

お盆休み最後の日曜日のせいだろう、下ってくる人が多い。まるで高尾山のような人の多さである。おそらく日帰りで登って来たと思われるような、ほとんど手ぶらの人も少なくなかった。

なだらかな大樺沢沿いの道を順調に進み、右俣コースと左俣コースに分かれる二俣に差し掛かる頃になると、下ってくる人とすれ違うこともほとんどなくなった。二俣からはバットレスも見えるはずだが、残念ながら北岳は雲に覆われている。しかし、鳳凰の稜線の上には青空が広がっていた。



二俣。左の雪溪が八本歯ノコルへ向かう左俣。



ダケカンバの樹林帯の道を登る



交差点になっている二俣

樹林帯を抜け、御池小屋からの道と合流すると、お花畑となり、程なく小太郎尾根の稜線に出た。鳳凰が雲の間から覗いていたものの、他は雲に覆われて展望は利かなかった。



小太郎尾根直下のお花畑



鳳凰の稜線（早川尾根）

右俣コースは地図上で見ると等高線が混んでいて傾斜がきつそうだが、歩いてみると地図から想像するほどはきつくはなかった。しかし、だんだん寝不足の影響が出始め、足が止まるようになってしまった。途中、ダケカンバの林でサルの群れが大騒ぎをしていた。



稜線に出た



鳳凰の山々

ここからは眠くてなかなか足が進まず、霧の中、
なだらかな登りを、あくびを連発しながらだらだ
ら進む。



北岳山頂へ向かうなだらかな稜線

午後 4 時 40 分、ようやく肩の小屋に到着。ご
主人に聞くと、この日の朝は、甲斐駒ヶ岳や千丈
岳が少し見えただけだが、明日は天気が良くなる
んじゃないか、ということだった。



霧に煙る北岳小屋

手続きをして、小屋のすぐ前のテント場に行く
と、茶髪の学生の団体が野球ごっこをして大騒ぎ
をして場所をふさいでいたので、ずっと離れた所
にいい場所を探し、テントを張った。

2日目 8月18日(月)

北岳肩の小屋 4:10 — 4:40 北岳山頂 8:00 — 8:50 北岳山荘 9:15 — 9:45
中白根山 — 10:45 間ノ岳 12:00 — 12:40 三峰岳 — 13:20 三国平 —
13:50 熊の平小屋(幕営)

(歩行時間: 4時間40分)

この日は、何とんでも北岳からの展望が一番の楽しみだった。山と高原地図にも「展望最高」と書いてある。山頂でご来光を迎えるのに間に合うよう、3時過ぎに起床。外に出てみると、月明かりの中、甲斐駒や仙丈どころか、富士山、そして北アルプスまでぼんやりと見える。食事を簡単にして急いで済ませ、4時過ぎに暗い中を出発。快適な稜線を登るが、西からの風が強く、寒い。

出発してちょっとすると、親子と思われる中高年の2人組が降りてきた。もう頂上まで行って来たのかと聞いたら、風が強いので頂上に登るのをあきらめて引き返して来たということだったが、そこまで風は強くはなかった。次第に空が白み始め、東の空が焼けてきた。



空が白み始める。稜線は鳳凰三山。

4時40分、山頂に到着。前日、野球をやっていたのとは別の、もの静かな学生の団体がすでに日

の出を待っていた。



北岳山頂と西に傾いた満月

目の前に鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳が聳え、富士山、八ヶ岳、中央アルプス、遠くは北アルプス全体や妙高までが一面の雲海の上に浮かんでいる。槍ヶ岳やキレットまでくっきりと見える。

程なくして御来光を迎えた。学生たちが歓声を上げる。

(ご来光の光景、そしてこの雄大な展望を言葉でお伝えすることは私の能力を超えているので、写真でお楽しみいただきたいのですが、ファイルが大きいので別に添付いたします。)

次第に頂上に人が多くなってきたが、前日夕方に肩の小屋で見かけた人の数から考えると不思議なくらい少なかった。



人で混みだした山頂

最高の展望に見とれてのんびりしていると、10人ほどの集団が登ってきて、カールがどうのこうの、地形がどうのこうのと言っている。聞いてみると、明治大学と静岡大学の地理学の共同研究チームで、調査に来ているとのことだった。そのみなさんに、この一帯の氷河地形などのことについていろいろ教えていただいた。いろいろ知っていると、山登りもさらに楽しくなると思う。

ある人が、北岳の三角点が三等になっていることに気づいた。中には、「日本で2番目に高い山なのに、三等三角点とは、かわいそうに。」と言って、三角点をなでる人もいて、可笑しかった。それにしても、三角点の等級は何を基準につけられるのだろう。

飽きない景色になかなか立ち去りがたかったが、この日の行程は熊ノ平までで短いとはいえ、あまりぐずぐずしているわけにもいけないので、名残惜しかったが出発することにした。結局、北岳山頂で3時間半近くものんびり過ごした。

山頂から下り始めたところで、雷鳥の親子を見かけた。南アルプスで初めて見た雷鳥だった。



雲海を見つめる雷鳥の母鳥

間ノ岳への稜線は、見晴らしのよいなだらかな稜線で、歩きやすく、とても快適だった。



間ノ岳への稜線と北岳山荘

途中、北岳山荘にある、南アルプス唯一の診療所（昭和大学）に寄ってみた。診療所の前で写真を撮っていると中から学生が出て来たので、話を聞いてみた。

昭和大学の診療所は、クラブ活動として医学部生と看護学部生たちが運営しており、白馬にも診療所を持っているそうだ。高山病の患者さんが圧倒的に多く、外傷の患者さんが少ないということだった。山荘の仕事を手伝う代わりに山荘から食事を出してもらっているそうで、私が訪ねたほとんどの山岳診療所が自炊をしていることと併せて考えてみても、私たちの潤沢診療所がヒュッテにいかによくして頂いているか、改めて実感した。

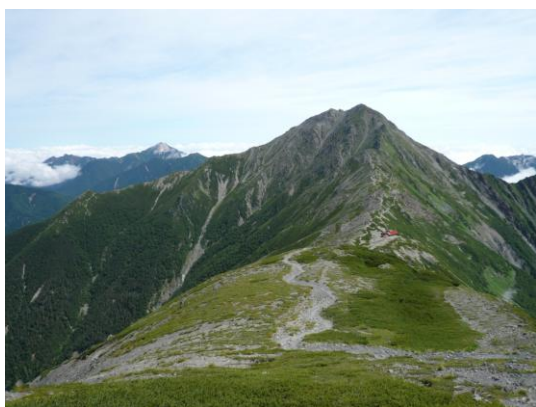


北岳山荘。右のこげ茶色の離れが診療所。



昭和大診療所の入り口。

再び稜線の道に戻り、間ノ岳へとむかう。振り返ると北岳が大きい。



北岳。左後方は甲斐駒ヶ岳。

程なく間ノ岳山頂に到着。人は誰もいなかった。山頂の標識に「東海パルプ社有林」とある。ここ南アルプスの稜線はもちろん国立公園なのだが、驚いたことに、間ノ岳から南の静岡県側一帯はすべて東海パルプの民有地らしい。

南には、これから縦走する塩見岳、荒川岳が姿

を現した。北方には、北岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ガ岳。ここも 360 度の展望台だった。



間ノ岳山頂。標識の右上が塩見岳、その後ろの、標識の左上の少し高いのが南アルプス南部最高峰の荒川岳 (3141m)。



右から、北岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ガ岳。

ここも眺めがよく、風があつてやや寒かったものの、ぼーっと景色を眺めているといつの間にかうとうとしてしまった。20 分ほどして目が覚めたが、動く気になれず、時間もちょうどよかったので昼食を取ることにした。食事を作っていると急に雲が出始め、周囲の山々はあっという間に雲に隠れてしまった。目的地の熊ノ平まではわずかだが、テントを張る前にザーザー降られるのはごめんなので、重い腰をあげて出発することに。

見通しの良い稜線を、仙丈ガ岳へと向かう道（仙塩尾根）の分岐となっている三峰岳（みぶだけ）へと向かい、程なく山頂に到着。



形の良い三峰岳。山から左右に延びる稜線が仙塩尾根。右へ行くと仙丈ガ岳、左へ行くと塩見岳。

三峰岳は、標高が 2999m と、残念なことに(?) わずか 1 m だけ、3 km に届かないためか、有名ではない。地形的にみると、大きな間ノ岳の稜線のおまけのような感じだが、形の良いピークで、私は気に入った。

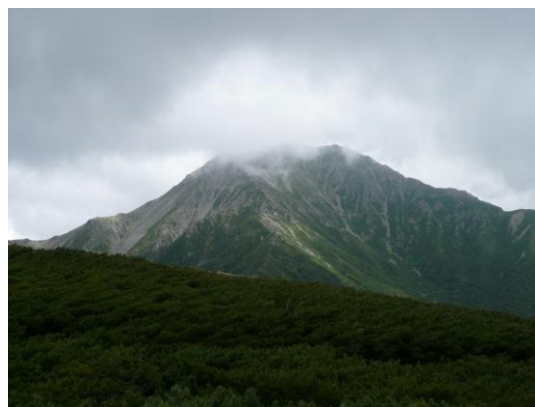
三峰岳から仙塩尾根を南にたどると、ペンキで大きく「クマ」と書かれたマークが次々と現れた。



「クマ」のマーク

これまでは、マークは丸印か矢印だけで、最初は「これは熊が多いということかな?」と、ちょっと緊張したが、どうやら「熊ノ平へ」という意味らしかった。道は明瞭で印も要らないくらいなのに、わざわざ「クマ→」とたくさん印をつけた人に、遊び心を感じて可笑しかった。(「クマ」という言葉になぜか少し滑稽な響きを感じるのは、プーさんのせいだろうか…?)

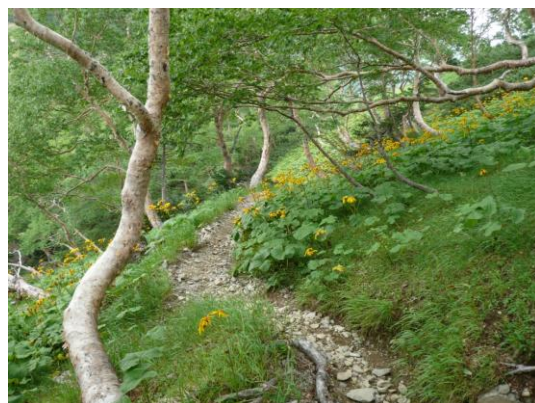
南に進むにつれて左手の農鳥岳の形が次第に良くなるが、残念ながら山頂は雲に隠れている。



農鳥岳の山塊

しばらくならかな道を進むと、正面の樹林帯の中に熊ノ平小屋が見えてきた。

三国平からやや急な、ダケカンバの樹林帯の中を進む下り道となる。ダケカンバの林床には鮮やかなマルバタケブキのお花畑が広がり、目を楽しませてくれる。



ダケカンバの樹林帯とマルバタケブキのお花畑

次第に眼下の熊ノ平小屋が大きくなり、程なく小屋に到着。晴れていれば、小屋の前のテラスから眺められる農鳥岳がきっと見事なのだろう。



熊ノ平小屋。手前がテン場。

テン場は分散していて一つ一つの場所は狭いのだが、水が豊富に流れていて快適だった。雨に降られることはなかったが、この後ずっとガスがかかったままだった。

3日目 8月19日(火)

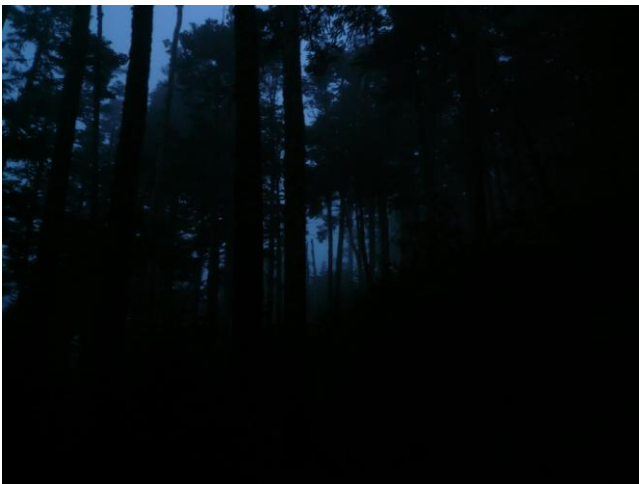
熊の平小屋 5:00 — 9:15 北俣岳分岐(蝙蝠岳方面との分岐) 9:20 —
10:05 塩見岳東峰 — 11:10 塩見小屋 11:30 — 13:15 本谷山 13:20 —
14:20 三伏峠(幕営)

(歩行時間: 8時間 50分)

前夜はずっと上空で強い風がゴーゴー吹いていた。雨は降らなかったが、早朝に起きると視界が5mもないほどの濃霧だった。前日の予報通り、この日は天気が悪そうだ。

3時に起床したが、あまりにも視界が悪いので、少し明るくなるのを待って5時出発。水分をたっぷり吸ったテントがすごく重たい。隣にテントを張っていた5人の学生の団体はとっくに出発していた。

しばらくは平たんな樹林帯の道だったので平穩だったが、稜線では強い風が吹いていて、ゴーゴーいっている。もし稜線に出て、風があまりに強くて危険そうだったら引き返そうと思いながら先を進む。日の出の時間を過ぎているのだが、樹林帯の中は薄暗くてライトが必要だった。



しばらくして、ハイ松とシャクナゲが混在している稜線に出た。すると、西から(進行方向右から)ものすごい風が吹き付けてきた。私は体重

70kg、ザックと併せて100kgほどあるというのに、ときどき風にあおられて倒れそうになる。しかも、霧を含んだ風が眼鏡を濡らし、前が見にくい。



ハイ松の稜線の上を強風が吹き荒れる

ハイ松の稜線の道と、稜線の風下の東側の樹林帯の道を交互に進むようになる。樹林帯に入るとほっとする。原生林が霧に煙る様子も魅力的で、気持よく進めるのだが、稜線に出ると風に倒されないように踏ん張って歩かなければならず、ガクッとペースが落ちる。しかも、全体的に西側が崩れ落ちていて、落ちたらまず助からないようなものすごい崖となっている。風が東から吹いていたら、西によろけて滑落する危険があるのだが、幸い風は西の沢から吹き上げていて、倒れてもハイ松の緩やかな斜面なので、そういう意味では安心だった。



蝙蝠岳への分岐に近づくと、ずっと稜線上の道となり、進につれてさらに風が強くなってきた。

向こうから、60歳前後だろうか、夫婦がやってきた。風はこの先さらに強くなるという。この夫婦とすれ違ってすぐに、学生の団体が向こうからやってきた。熊ノ平から先に出発した学生さんたちだった。話を聞くと、この先あまりにも風が強くて、吹き飛ばされそうになるので、引き返して来たと言う。私の気持ちもすこし揺れたが、この学生さんたちには申し訳ないがみなさん痩せていて強風に吹き飛ばされてもおかしくなさそうな体型の人ばかりだったし、例の夫婦も超えて来たのだから、本当にどうしてもだめそうなら引き返すことにして、自分で行ってみることにした。

進むにつれて、風がさらに強くなる。普通に歩いていると煽られて倒れるので（実際に何度かハイ松の上に倒れてしまった）、重心を低くして歩く。風が息をつくときにできるだけ進むようにし

て、なんとか蝙蝠岳方面への分岐（北俣岳分岐）に到着。



蝙蝠岳への分岐（北俣岳分岐）

ここから道は南西に折れ、塩見岳東峰（3052m）への最後の登りとなる。道は稜線よりも少し風下側を通っていたので風が遮られて歩きやすかったが、先ほどの強風地帯の歩きで疲れて少しきつかった。

10時過ぎ、塩見岳の頂上に到着。天気が良ければここも最高の展望のはずだが、濃霧ですぐ先の西峰（3047m）すら見えない。頂上に立った感慨は全くなかった。北からの強風でじっとしている気にはなれず、全く休まずに東峰を通過。西峰も通過すると、やや険しい岩稜の下りとなる。霧で岩が濡れていて滑りやすく、慎重に下った。



塩見岳東峰山頂（3052m）



塩見岳西峰山頂 (3052m)

途中、ぜ～ぜ～言って登ってくる痩せた単独行の関西弁のおじいさんとすれ違った。塩見岳を超えて熊ノ平まで行くと言う。この先風が非常に強くて歩くのが大変で、しかも熊ノ平へ行くには時間が遅く、午後天気荒れる可能性があるので引き返した方がいいのではないかとしたが、「気一つけますわ」と行ってしまった。このおじいさん、大丈夫だったのだろうか…

中高年の登山者の事故が多いが、体力や技術、知識の不足などいろいろ原因があるだろう。私が気になるのは、朝遅く、8時や9時頃になってようやく出発し、夕方の5時や6時、下手をすると7時を過ぎて真っ暗になって目的地にようやく到着するというようなめちゃくちゃな行動パターンを取る人がかなり多いことである、しかも、地図も読めず、方角も判断できないような高齢者が単独でたくさん歩いている。これは中高年に限らず、若い登山客にも言えることである。私は、この3日後、呆れた若い登山客を見かけたが、その話はまた後で。

この夏も、一般登山道を歩いていたはずの中高年の登山客がすでに4人、行方不明になっているそう。百名山の番組で中高年の登山ブームになったことは決して悪いこととは思わないが、併せて登山に必要な知識を啓蒙する番組を徹底的に放送する必要があったのではないかと思う。

しばらく下り、塩見小屋についてほっとする。

この日はここで初めてまともに休憩を取った。



塩見小屋

塩見小屋は山の稜線にある小屋では珍しく完全予約制で、キャンセルすると2000円のキャンセル料を取られるという。

ここからはずっと樹林帯の起伏の少ない歩きやすい道となり、風も当たらず快適であった。しかし、やはり強風地帯で力んでばてて、ペースは上がらなかった。



目的地の三伏峠まであと1時間ほどの本谷山に到着。ここも天気が良ければ塩見岳の眺めが好いはずなのだが…。小休止を取っていると、遠くで雷が聞こえた。気温が下がり出し、寒冷前線が近づいてきているようだった。ここまで、風は強かったのだが雨は全く降らなかった。できれば雨の降る前にテントを張りたかったので、先を急ぐ。



三伏峠



三伏峠小屋で受付していると土砂降りに

程なく三伏峠に到着。先着のテントがすでに5張あった。まだ雨は降りだしていなかったし、「テントを張る前に受付を」と書いているので（南アルプスのテン場はほとんどそうだった）、小屋で



テン場から見た塩見岳（中央）

受付をしていると、急にザーザー降り出し、バケツをひっくり返したような雨になってしまった。しばらく小屋の玄関で雨宿りをしていると、雨が急に止んだので、急いでテントを張った。テン場はあちこち水浸しだったが、水はけのよい場所がよくわかって逆によかったのかもしれない。

運のいいことに、テントを張り終わった直後、またザーザー降り出し、今度は上空で雷が鳴り出した。しかもどんどん気温が下がって寒くなった。

ここでテントの中でゆっくり休めればよかったのだが、水場まで20分ほど歩いて水を汲みに行かなければならなかった。それまで雨具も靴の中も濡れていなかったのだが、この水汲みでびしょびしょになり、このときに濡れた靴の中と靴下は下山するまで乾くことはなかった。

テントの中で食事をしていると、次第に雨が弱くなり、ついに止んだ。前線が通過してしまったのだろう。外に出てみると、この日通って来た塩見岳がきれいに見えた。

4日目 8月20日(水) (その1)

三伏峠 5:20 — 7:20 小河内岳 7:40 — 8:50 大日影山 9:00 —
10:10 高山裏避難小屋 10:20 — (途中の水場で30分ほど休憩) — 13:20 荒川
前岳 — 14:00 中岳避難小屋(小屋泊)

(歩行時間: 7時間30分)

前日に寒冷前線が通過してから、気温がぐっと下がった。日本海に低気圧があってこの日も天気
の予想がつかないが、晴れていれば小河内岳から
の眺めがいいので、早めに出発しようと2時半に
起床した。テントから外をのぞくとガスがかかっ
ていたが、明け方までにガスがとれることを期待
して食事の準備を始めた。ところが、しばらくす
ると雨がザーザー降り出してしまった。出発の支
度をしてあとはテントをたたむだけとなったの
だが、ザーザー降りの中作業をする気になれず、
「日程に余裕があるから、今日はここで停滞して
ゆっくりしようかな」と、怠け心が頭をもたげて
きた。出発するかどうか迷ってテントの中でぐず
ぐずしていると、隣のテントのグループが出発し
た。これで急に晴れたらきっと後悔するので、出
発することにした。そう決めたとたん雨が止んで
くれた。

テントを急いでたたんでザックに突っ込み、5
時20分、ようやく出発。15年以上前に買ったテ
ントでもともと重く、防水もあまり効かなくなっ
て思いっきり水を吸ったテントの重みで、最初は
よたよたのろのろとしか歩けなかった。

最初は樹林帯を歩く。この周辺はウソが多い。
「フィーフィー」とか細い声で鳴くのだが、きれ
いな鳥である。亜高山帯の鳥だが、冬には低地に
下りてきて、八王子などでも見られる。

(<http://miyanooka1.sakura.ne.jp/uso.html>)



ちょっと行くとすぐに見通しの良いハイ松帯
となったが、残念ながら霧がかかって展望は全く
ない。しかし上空は明るく、青味がかった。

ここも、西側が崩れ落ちていて崖になっている。
道幅が狭くて、高齢者や初心者には結構危険と思
われるところもあった。風がかなり強く、霧で眼
鏡が濡れて歩きにくかった。



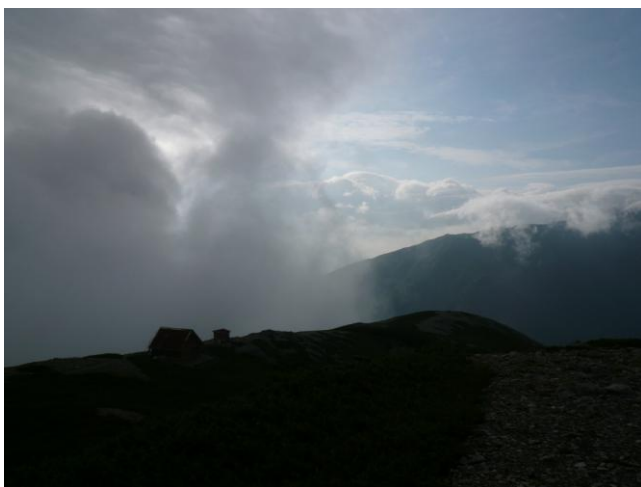
崩れ落ちた崖の縁を歩く

しばらく行くと、雷鳥の親子に遭遇。そのすぐ先に、別のつがいがあった。道をふさいでいて、どいてくれるのを待つが動かない。仕方ないので、前に進もうとすると、登山道を走って逃げる。怖がらせて申し訳ないので止まると、雷鳥も止まってじっとしてしまう。このようなことを何回か繰り返すとメスは脇の草むらに入って餌を啄み始めたが、オスは相変わらず道の真ん中でじっとする。申し訳ないけど、先へ行くことにしたら、メスを残して、私の前を、尻を振りながら走りだし、何百mか行ってからようやく脇へ逸れてくれた。



道の真ん中で立ち止まる雷鳥のオス

程なく、ビューポイントの小河内岳（2802m）に到着。すると、周囲一面霧の中だったのが、急に青空がのぞき始めた。



小河内避難小屋。向こうは、荒川・千枚岳の稜線。



歩いてきた稜線を覆う雲。

歩いてきた稜線を振り返ると、西の谷から吹き上げる風になびく雲で覆われている。しばらくすると、雲がみな吹き飛ばされて、先ほどの崩れた斜面が露わになった。

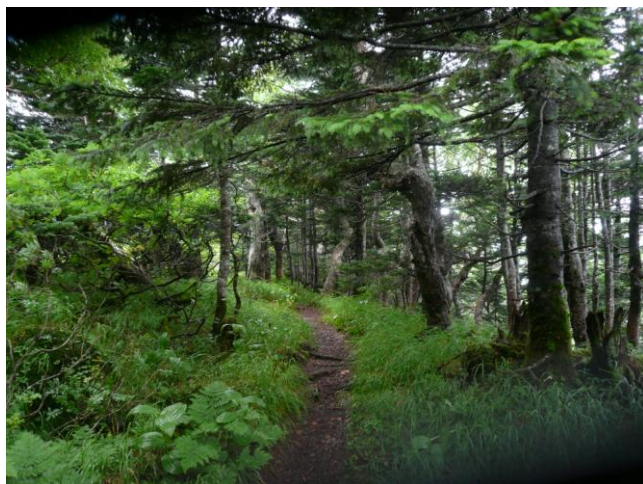
塩見岳や、これから向かう荒川岳の眺めを期待して頂上で少し待った。わずかに荒川岳が姿を現したが、すっきりと晴れるところまではいかず、上空の雲が下がってきて、どんよりとした空になってしまった。



姿を見せた荒川岳（中央左上が山頂）

道は樹林帯の道となる。大きなアップダウンもなく、樹林もきれいで、歩いていて気分がよかった。しかし、テントが水を吸って重いのもあるのだろうが、疲れもあるのか、この日は荷物がいやに重く感じられてペースが上がらない。アップダウンが少ないのは幸いだった。といっても、最後

に標高差 500mの直登が待っているのだが…。



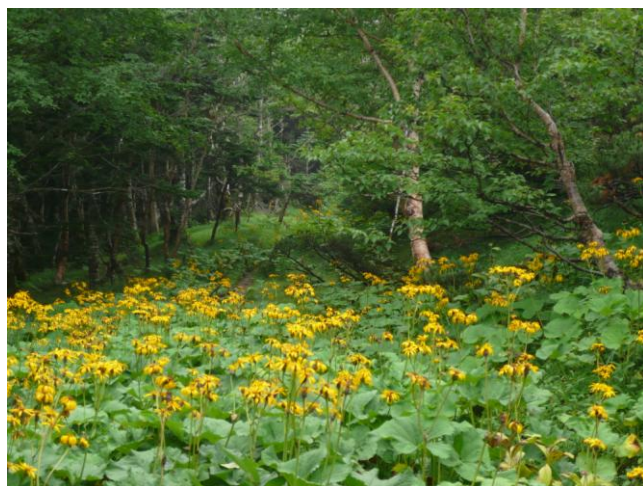
道は再び樹林帯の中を進む

西側が激しく崩壊しているところが多く、稜線ごと崩れ落ちてしまったと思われるようなところもあった。



西側が大きく崩れている

ダケカンバの見事な樹林とマルバタケブキのお花畑の道を進み、谷間にある高山裏避難小屋に到着。この一帯はシラビソの原生林が広がっているのだが、テン場は樹林帯の中に分散して作られている。このような原生林の中で泊まってみたい誘惑に駆られたが、この日のうちに中岳まで上がっておかないと翌日が苦しくなるので、先へ進む。



ダケカンバの樹林とマルバタケブキのお花畑



高山裏避難小屋

小屋からは、稜線ではなく北側の斜面を巻く。しばらくは、シラビソの原生林の中を緩やかに登っていく。見事な原生林に見とれて、足が止まってしまう、なかなか進まなかった。



見事なシラビソの原生林

しばらく行くと、カールの中に出た。ここで、

中岳避難小屋から下りてきた 10 人ほどの大人しそうな学生グループとすれ違った。高山裏避難小屋が目的地だというから、1 日の行程がわずか 2 時間ほどで、ずいぶんゆったりだなあ、と思ったが、この時間では次にテントを張れる三伏峠へ行くには遅すぎる。ダケカンバの樹林の中を少し急登すると、瓦礫が川のように積もっている大斜面の末端に出た。ここから、標高 3000m の荒川前岳まで、傾斜はそれほどきつくはないのだが、500 m の直登である。体力的にはきついのだが、ちょっと歩くとどんどん高度が上がリ、爽快だった。しかも、登るにつれて、初めは雲が覆っていた稜線から雲がとれ、見晴らしがよくなってきた。



この標高差 500m の瓦礫の道を直登する



稜線からカールを見下ろす



カールの縁をなす稜線。西側は崩壊。

ようやく稜線にたどり着き、稜線上を進むと荒川前岳 (3068m) に到着。この稜線の南西斜面は、地図にも「大崩壊地」と書いてあるが、実際にその崩れ方を目の当たりにして、唖然としてしまった。斜面が崩れているというよりも、山の稜線が固まりごと全部下に落っこちてなくなってしまったような感じなのだ。前岳を含むこの稜線は、少し前までもっともっと高かったのではないかなと思うのだが、どうなのだろう。

私も今回の山行まで知らなかったのだが、荒川岳というのは 1 つのピークの名前というよりも、荒川前岳 (3068m)、荒川中岳 (3083m)、荒川東岳 (3141m : 日本 6 位の高さ)、丸山 (3032m) のピークが連なった山の塊のことを指すようで、前岳、中岳、東岳を荒川三山というそうである。最高地点の東岳は代表して荒川岳と呼ばれることも多いようだが、地元の人は悪沢岳という別名で呼んでいるようである。このようなことをなぜだらだら書いたのかと言うと、地図をお持ちの方は見ていただけるとお分りの通り、三山の配置が不自然なのである。中岳と東岳の距離に比べて、中岳と前岳が近すぎるし、地形的にも前岳を区別する魅力を感じないのだ。なぜ、中岳と前岳を区別して、わざわざ「三山」と呼ぶのか不思議だった。しかし、かつては前岳はもっと高くてピークがもっと西にあったものが、西からどんどん崩れて、ついにはかつてのピークも崩れて頂上が低くなりつつ東へ移動し、今のような状態に至ったの

ではないかと、この大崩壊を見て思った。数十年前の古い地図をお持ちの先生方、今の地図と比較してみてくださいませんか。

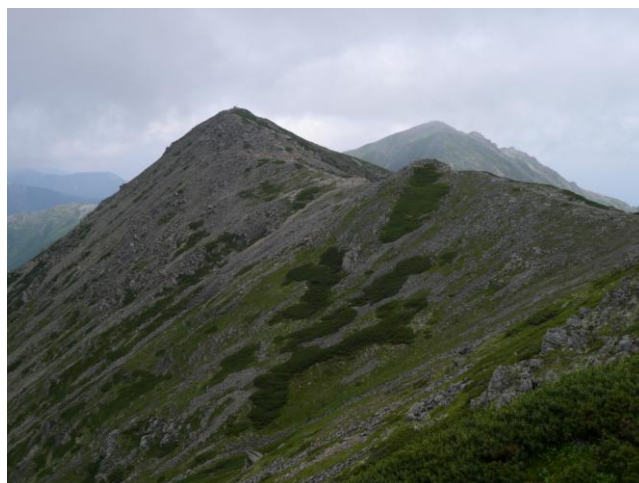


荒川前岳山頂。西側は崩壊して切れ落ちている。



前岳の西側はこんなに激しく崩壊

前岳で、このようにあれこれ考えて休んでいると、雲に覆われていた東岳（悪沢岳）が中岳の向こうに姿を現した。しかし、この日、悪沢岳がきれいに見えたのはこの一瞬だけだった。手の届きそうな距離にある中岳へ向かい出すと、再び雲の中に隠れてしまった。南の方向に、すぐ近くに見えるはずの赤石岳はずっと雲の中だった。



中岳（荒川中岳）とその奥に悪沢岳（荒川東岳）



赤石岳

なだらかな中岳山頂を過ぎると、避難小屋が目の前に。14時ジャストに小屋に到着。一面、ガスがかかって、見晴らしはまったくなくなってしまった。この後、ガスの消えることはなかった。

ここは避難小屋となっているが、夏季の登山シーズンは管理人が入っていて、素泊まりで1泊4500円かかる。この夏、あちこち山へ行った私は、できることなら高くてもせいぜい1泊600円のテント泊ですべて済ませたかったが、ここはテント場がなく、一番近いテント場のある荒川小屋だと2時間以上余分にかけて、明日の朝、悪沢岳山頂に登りに来ることになるので、この日は已むをえず避難小屋に泊まることにした。水場がないので、途中の水場で汲んで担ぎあげたが、この小屋では天水だが無料してくれた。



中岳山頂



中岳避難小屋



この日、小屋に泊まったのは私一人だけで、管理人さんから、いろいろな話を聞くことができた。

南アルプスにいくつかある避難小屋は、かつては本当に避難小屋で無人だったのだが、みなボロボロになったので、十数年前、県がきれいに作り直して、その管理を土地の所有者である東海パルプに任せたらしい。国立公園でしかも高山植物などの保護のためにトイレの汚物ははへりで下界に下げなければならいのだが、国や県からは一切補助がでないので、避難小屋を有料にして、その収入でトイレ関係の費用に充てているが、やはり赤字だということである。最初は、避難小屋なのになんでこんなにお金を取るのだろうかと思っていたが、話を聞いて納得がいった。

前日の夕方から寒かったが、標高が 3000m を超すこの小屋はもっと寒く、夕方の時点で 5℃ だった。

5日目 8月21日(木) (その1)

中岳避難小屋 6:00 — 6:35 荒川東岳(悪沢岳) 6:45 —
7:20 中岳避難小屋 8:50 — 10:10 荒川小屋 10:50 — 11:10 大聖寺平 —
12:15 東尾根(赤石小屋方面)への分岐 — 12:30 赤石岳山頂 13:40 —
14:20 百閒平 — 14:40 百閒洞山の家(幕営)

(歩行時間: 5時間10分)

前夜、テント場ではなく小屋に泊まったのは、悪沢岳の山頂で北岳の時のような御来光と展望を期待したからだった。地図では1時間半ほどとなっているが、山頂まで軽装で往復なので、1時間で行けると考え、3時半に起床、食事セットを持ってすぐに出発しようと思った。しかし、外は霧が濃く、出かけようとしたら雨がザーザー降り出した。山頂で景色を眺めながら食事を作るつもりだったが、雨では火を使えないので、小屋で食事をしてから出発することに。霧が晴れることを期待しながら食事をするが、外が明るくなっても天気の良くなる様子がない。これでは、日本で6番目に高い悪沢岳のピークを踏みに往復するだけになるだろうと、あきらめ気分でお茶を飲みながら小屋の管理人さんとおしゃべりをしていた。この日は赤石山頂の避難小屋までで、行程がすごく短いので、のんびりできた。

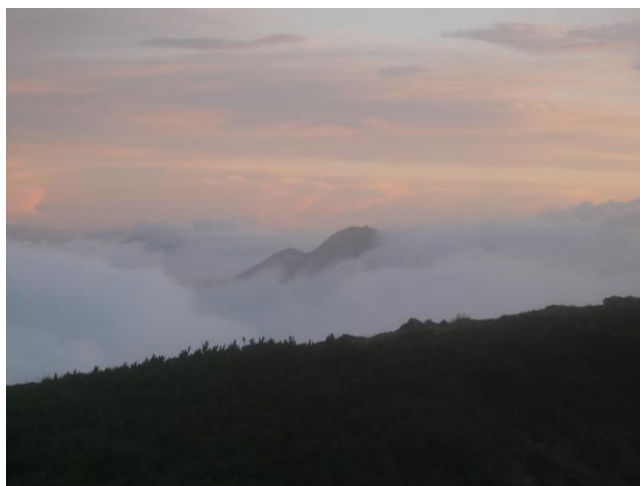
荒川岳周辺の避難小屋(小河内、高山裏、中岳、赤石山頂)は、東海パルプが管理していて、夏の間3ヶ月間、管理人を一人ずつ(小河内は夫婦らしいが)派遣して常駐させている。一人なので、3ヶ月間は1日も下界に下ることができないそうだ。管理人さん達は準職員のような形で派遣されるようである。

ここ中岳の管理人さんは変わっていて、(彼は他の人たちのほうが変わっていると言っていた。確かに、赤石山頂の管理人さんも変わっていたが、その話はまた後ほど。)大学で数学を専攻したの

だが、今は航空力学に興味を持っていて、登山客の来ない暇なときなどは物理学を勉強しているそうだ(特に目的があるわけではないらしいが)。

ずっと一人でいてストレスがたまると、マナーの悪いとんでもない中高年の登山客が多いと、私にたくさん愚痴をこぼしていたが、共感できる話も多かった。

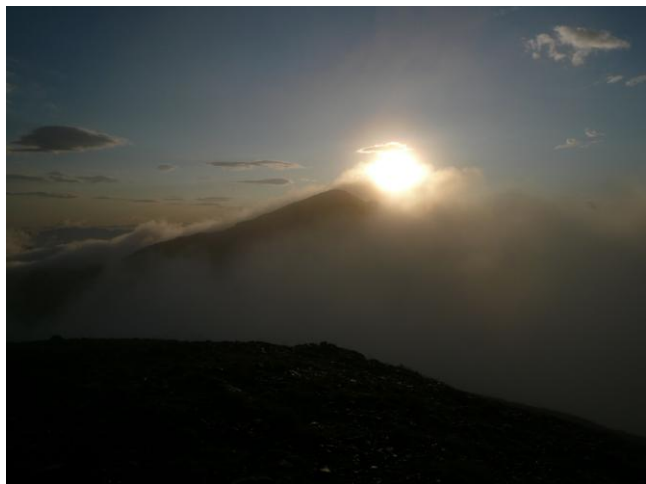
あまりゆっくりし過ぎるのもどうかと、そろそろ出掛けようと準備を始めたら、管理人さんが外に様子を見に行った。「晴れてきたよ!」との声に外に飛び出してみると、北の方角は青空がのぞいている。しばらくすると、北の方の雲がだんだん下がって、塩見岳が姿を現した。



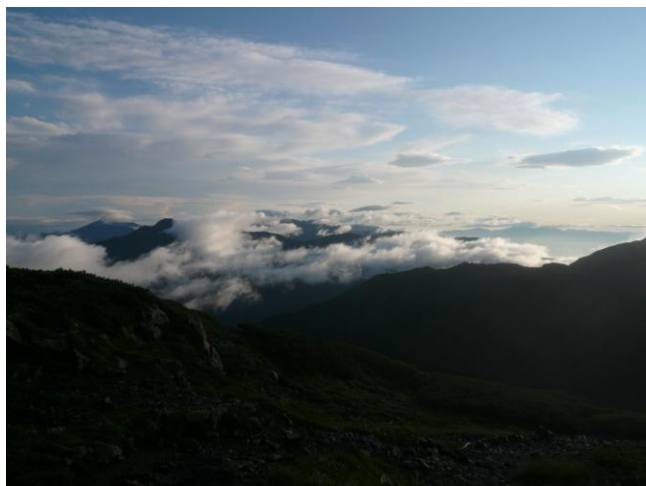
塩見岳

あわてて小屋に引き返し、飲みかけのお茶を飲み干し、カメラだけを持って外に飛び出すと、東の方角もどんどん霧が晴れていく。そして、ついに悪沢岳の稜線が姿を現した。そのまま、東へ悪

沢岳頂上を目指して出発するとすぐに、悪沢岳の頂上付近にかかる雲から朝日が顔をのぞかせた。



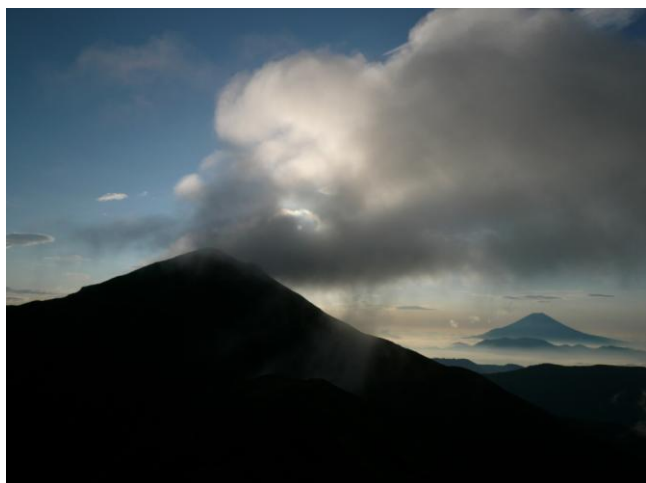
周囲のガスがどんどん薄くなる。南は一面の雲海である。



南の方角

やがて、悪沢岳の右手の雲が薄くなり、中から富士山が姿を現した。どんなに文才のある人でも、この時の光景を言葉で表現することはできないのではないかと思います。今回の山行で一番強く印象に残った光景だった。（写真をたくさん撮ったので、拡大したものをまたいくつか別にお見せします。ただ、この景色に関しては、満足のいく写真は1枚もありませんでした。この微妙な光の加減や色合いは、残念ながら私の写真の腕では伝えられません。）





避難小屋から緩い下り坂を下りきり、鞍部に達すると富士山は悪沢岳の稜線に隠れてしまった。急な岩場を登っていると再びガスがかかりだし、周囲は全然見えなくなってしまった。小屋から 35 分で山頂に到着。



鞍部付近から仰ぎ見た悪沢岳

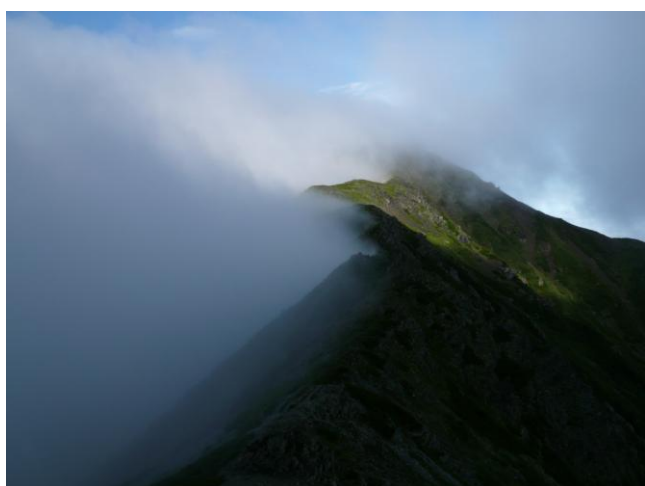


山頂への道の脇はお花畑



悪沢岳山頂 (3141m)

山頂は霧の中で展望は全く得られなかった。10 分待ったが寒いのであきらめて下ることに。



中岳への稜線。強い風が北(右)から吹き上げて、稜線の左は風に飛ばされて雲がない。

やや下ると、雲の中から抜け出したが、稜線の南側は雲に覆われている。北から山の斜面沿いに強い風が吹きあげているため稜線の北側(右側)は雲が全部飛ばされて、稜線の南側の風の当たらない部分には雲がたまっている。まるで、南斜面から雲が生まれて湧き出しているようだった。

山頂から小屋までの帰りも 35 分だった。コースタイムが往復で 3 時間以上のところ、空身なのでのんびり歩いても 70 分しかかからなかった。

小屋に着くころにはまた濃い霧に覆われて視界がなくなってしまった。展望を楽しみながら歩こうと思っていたので、小屋で管理人さんと話を

しながら、また霧の晴れるのを待ったが、1 時間半待っても変化がないので出発することにした。

ところが、小屋を出ると急に青空が広がり出したが、私は、自分は晴れ男ではないかと思っているのだが、残念ながら弱い晴れ男で、おもしろいことに、天気がよくななくても自分のいる周囲と行く先がわずかに晴れることが多い。(北アルプスでも、実はしょっちゅうこのようなことがあった)しかし、空全体をすかっと晴れにするほどの力はないようである。雨男と一緒にいると簡単に負けて雨になってしまう(経験多数あり…?)。



急に晴れだした。中央は中岳山頂(避難小屋から)。

前日は、小河内岳近くでおじいさん一人とすれ違い、例の 10 人ほどの学生とすれ違っただけだったが、この日にはぎやかだった。千枚小屋から悪沢岳を超えてぞろぞろ赤石方面に向か単独行やグループを追い越し、また荒川小屋から千枚小屋に向けてぞろぞろ登ってきた人たちとすれ違った。百名山で高さが日本 6 位の荒川岳と 7 位の赤石岳を 2 泊で楽しめるコースとなれば、人気があるのもうなずける。しかも、荒川も赤石もそれぞれ山容が大きくてすごく立派なのである。北アルプスと比べて、南アルプスの山は一つ一つが大きくどっしりしている感じがある。



富士山と周囲の山々。御坂山塊、雨が岳・毛無山。

中岳から荒川小屋に向けて下り始めると、東に再び富士山が見えるようになった。先ほどは悪沢岳の影に隠れて見えなかった、私の好きな三ッ峠や御坂山塊、そして毛無山、愛鷹山がぐるっと富士山を取り巻いている。伊豆の天城山まで見える。しばらくすると、ずっと雲に覆われていて見えなかった赤石岳からようやく雲がとれ、その姿を現した。



赤石岳。荒川小屋が見える。

素晴らしい眺めを楽しみながらのんびり歩いたので、コースタイムを大きくオーバーして荒川小屋に到着。「手作りカレー」とあったので、迷わず注文(1000 円)。確かにおいしかったが、やはり双六小屋の具たくさんカレーを思い出してしまう。



荒川小屋の入り口

ここは小屋からもテン場からも正面に富士山が見え、いい場所だった。今度は是非ここでテントを張ってみたい。

荒川小屋からは、しばらく斜面の中腹を等高線沿いに歩き、大聖寺平から赤石山頂への急な登りとなる。それほどきつい登りではなく、先に歩いていた人たちがあちこちで休んでいる脇を通り抜け、一気に 3000mを超える小赤石の肩へ。そこからは 3000mのなだらかな稜線歩きとなり、程なく赤石岳山頂に到着。眺めを期待していた荒川岳はあいにく雲の中だったが、南に聖岳が大きな姿を見せていた。



荒川小屋からは斜面の中腹を歩く



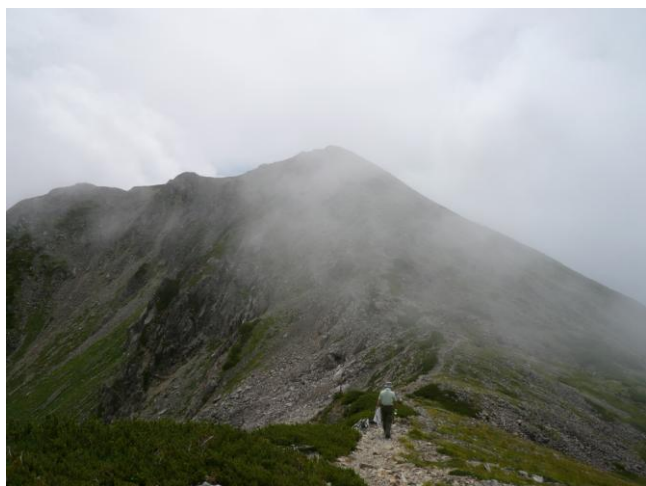
大聖寺平



赤石岳への登り



山頂付近の稜線。ピークは小赤石岳（3081m）



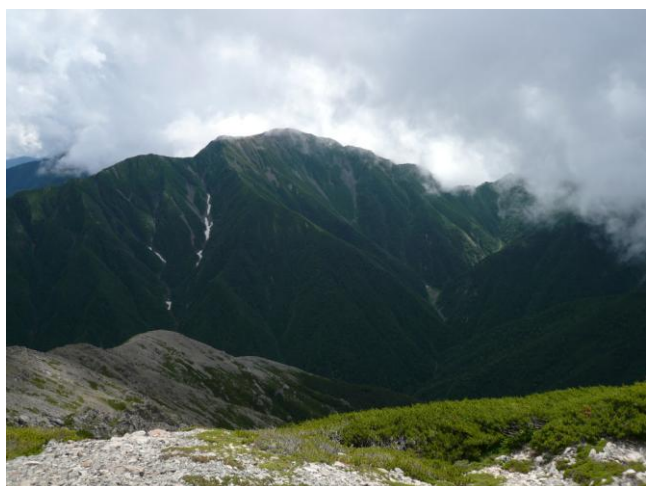
赤石岳山頂が近づく



赤石岳避難小屋



赤石岳山頂



大きな山容の聖岳（3013m）（赤石山頂付近から）

山頂からの眺めは後でゆっくり楽しむことにして、山頂直下にあるこの日宿泊予定の赤石避難小屋へ。戸を開け挨拶すると、奥から人の好きそうなひげ面の管理人さんが出てきた。片手に、『夏子の酒』という本を持っている。顔が赤く、なんとなく目の焦点が合っていないような気が…。

一泊したいと言ったら、「早いねえ、どこからきたの？これからどっちへ行くの？」と聞かれたので、翌日は聖平まで行きたいが、夕方と明朝の眺めを期待して、テント泊の縦走だが敢えて赤石では山頂の避難小屋に泊まる計画で来たことを伝えた。「う〜ん、眺めねえ…。これから天気はどうかかわらんよ。夕方と明日の朝もだめな気がするなあ。早いんだから百間洞まで行っちゃった方がいいんじゃないの？」「中岳の管理人さんも言っていたけど、百間洞は眺めも何もなく面白くないんでしょう？」「そうだな、眺めはないな、確かに面白くないな。ところで、最後はどこに下りるんだい？」「寸又峡のつもりです。」「寸又峡かあ、あの林道は長いぞ。そうだ、そんならいい道があるぞ。光岳からちょっと下ると、信濃俣へ行く分岐があるんだ。そこから尾根通しにし信濃俣を超えて、大根沢山を越えて・・・」と地図もなしに説明を始めたので私は地図を取り出して見せた。

「光岳からちょっと下ると、この百俣沢ノ頭ちゅう信濃俣へ行く分岐点になるんだ。そこから信

濃俣を超えて、大根沢山を越えて尾根沿いに行くと大無間山の道にぶつかるんだ。そこから大無間山には行かないで反対に尾根沿いにこう行くと、朝日岳に出るから。朝日から寸又峡までは普通の登山道だからすぐだよ。これがいい。このコースで行ったらどうだい？」「でも、ここはものすごい藪なんですよ？」「そうでもないよ。数年前に、この一帯の笹は花が咲いて全部枯れてしまったよ。」「管理人さんは歩いたことあるんですか？」「もちろんあるよ。10年前だけど。」「・・・」「そうだ、このコースはいいよ。このコースで歩いてほしいなあ。」「確かに尾根沿いの道、魅力的ですねえ…。でも、本当に藪じゃないんですか？危ない所、いっぱいあるんじゃないですか？」「光岳通るだろ？小屋の原田さん（管理人さん）に聞いてみたらいいよ。彼は詳しいから。このコースは絶対おもしれえよ。是非歩いてほしいなあ。」「ところで、他に面白いコースありますか？いいコースあったら、今度来ようかと思うんですが。」「いっぱいあるぞ。深南部（南アルプスの光岳以南）はやっぱ面白いよ。そうだ、いい本があるよ。」と、奥から本を1冊持ってきた。『南アルプス 大いなる山 静かなる山 知られざるルート 120選』とある。ぱらぱらめくってみた。「東京帰ったら買いますよ。」「絶版になっちゃったんだ。重くなって嫌じゃなかったら、これ、あげるよ。もう1冊あるから。深南部はいいよお。このコース、本当に歩いてほしいな。歩いたら、教えてね。」と、本を貰ってしまった。

ただ、最新の地図でも点線にすらなっていないコースが藪でないわけないだろうなあ、光小屋でご主人に聞いたらはっきりするだろう、と思ったが、確かにずっと稜線沿いに寸又峡まで歩くというのは非常に魅力的である。本当に行けるコースなら、また今度来てみるだろうと、管理人さんに答えた。

このまま小屋に泊まるかどうか迷ったが、先へ行くことを強く勧めるので、時間も早いし、この日は行程が短くてさほど疲れていなかったから、

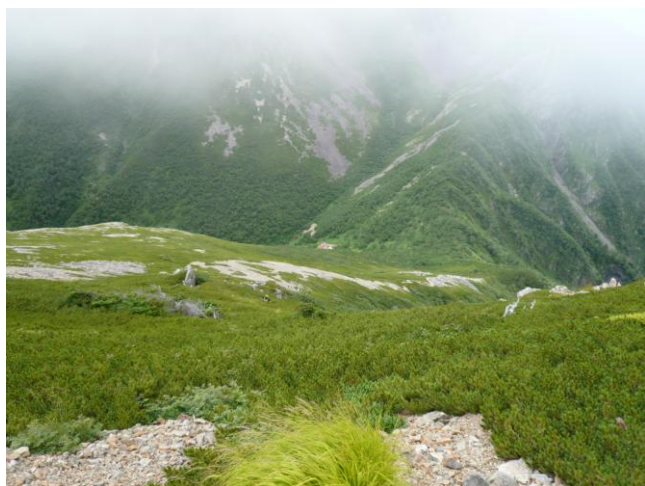
百間洞まで進むことにした。

ガレ場を少し下るとハイ松帯の平らな道が続き、快調に進む。



百間平付近

しばらくすると、雲がどんどん広がり、背後の赤石岳も見えなくなってしまった。快調に進み、急な下りになると目的地の百間洞の小屋が見えた。赤石岳から百間洞までコースタイム2時間半のところ、1時間で到着。この日は、テントは相変わらず濡れて重いままだったにもかかわらず、空身だった悪沢岳往復は別として、コースタイム6時間半のところ、4時間しかかからず、快調であった。

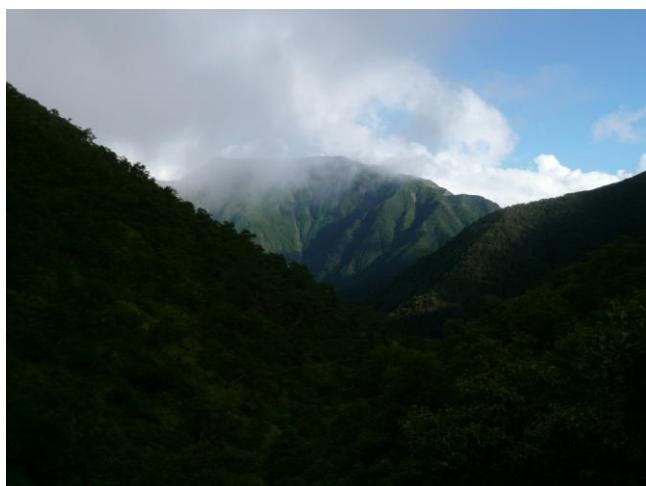


百間洞山の家が見えてきた



百間洞山の家

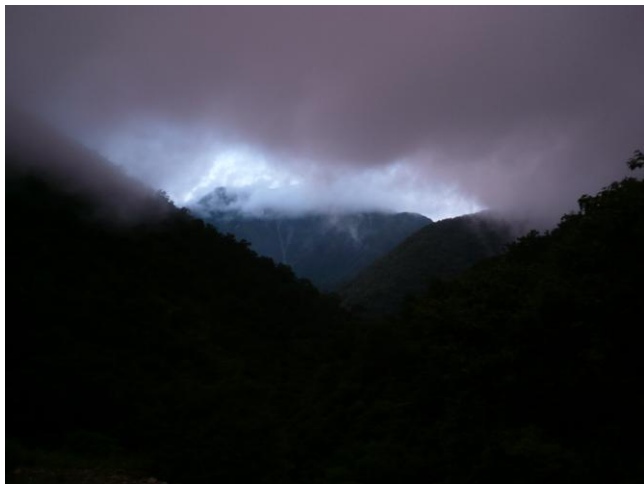
小屋で受付を済ませ、テントを張る場所を探す。場所は指定なのだが、この日は人が少ないので好きな所にどうぞ、ということだった。テン場は3か所に分かれていて、うち2か所はすでに先客がいた。いちばん小屋から遠い、翌日最初に登る大沢岳の登山口にある3か所目のテン場に行くと、正面に聖岳を望める素晴らしい場所だった。（他の2か所からは聖岳はほとんど見えません。もし、百間洞でテントを張ることになったら、「21番」がお勧めです。）しかも、周囲は見事なダケカンバの樹林帯で、面白くないどころか、今回の山行で最も気に入ったテン場だった。



テン場から眺める聖岳

しばらく聖岳の眺めや、周囲の景色を楽しんでいると、雲雪が怪しくなってきたのでテントを張

ると、ザーザー雨が降り出し、遠くで雷が鳴り出した。雨はすぐに止み、ときどき雲の間から聖岳や大沢岳の稜線が見えたが、赤石の方向は分厚い雲に覆われていた。管理人さんの言った通り、赤石山頂からはきっと夕陽を見ることはできなかったのだろう。



雨雲の間から覗く聖岳。雷が鳴っていた。